

# コミュニケーション論における エドワード・サピアの言語論の現代的意味 —言語相対性仮説を越えて—

見城 武秀

1950年代以来、言語相対性仮説（サピア＝ウォーフの仮説、あるいはウォーフの仮説とも呼ばれる）は言語学／人類学／哲学／心理学／社会学など、多岐にわたる分野の研究者たちの関心を惹いてきた。仮説を支持する、あるいは否定する議論が現在まで数多くなされてきたものの、それらは普遍主義的な言語観と相対主義的な言語観の間で大きく揺れ動き、最終的な結論に到達することはなかった。

だが私見によれば、これらの議論は通常言語相対性仮説の主唱者と看做されているエドワード・サピアの言語論の要点を見落としている。サピアのテキストは彼の言語観が「言語論的転回」を遂げたものであることを示しており、この視点の根底的な変化は言語に関する普遍主義／相対主義という対立からその妥当性を奪ってしまうのである。

最も重要な点は、「言語／思考／現実」という3つの領域を互いに分離した独立の部分と看做す伝統的な言語観をサピアが否定し、代わりにこれらの領域の連続性と相互貫入性を強調したことである。このようなサピアの言語観は、L. ウィトゲンシュタインやJ. L. オースティンら、「言語論的転回」の先駆者と看做されている人々の言語観と通じ合っている。

## 1 序

歴史を繙くと、ひとつの問題を巡って二つの立場が対峙し、ひとびとの意見がその間を振り子のように行きつ戻りつするのを目にすることが間々ある。特に目を惹くものだけでも、古くは「普遍論争」における唯名論と実在論、比較的近くには光の波動説と粒子説、そして現代の社会科学における普遍論争の変奏とも言える方法的個人主義と方法的集団主義の対立などを指摘することができよう。これらの論争はそもそもその争点である対立自体が解消されるという

形で解決がなされることもあるし（波動説／粒子説の場合）、振子が二つの立場の間をいつまでも揺れ続けて未だ決着を見ないこともある（唯名論／実在論、方法的個人主義／方法的集団主義の場合）。

コミュニケーション論においても同様の振り子運動の一例を指摘できる。言語の普遍性を強調する立場と言語の相対性を強調する立場との対立であり、一般に言語相対性仮説と呼ばれるものを巡って行われてきた論争である。この問題は特に1950年代以降、言語学／人類学／哲学／心理学／社会学など多岐にわたる分野の研究者

を巻き込みながら数多くの理論的／経験的研究を生み出してきたものの、現在にいたるまで解決を見ていない<sup>(1)</sup>。だが私見によれば、この問題を巡って行われてきた議論はその出発点であるエドワード・サピアとベンジャミン・リー・ウォーフの言語観、特にサピアの言語論を十分に吟味・検討したものとは言いがたい。サピアのテキストには、従来争われてきたような普遍性／相対性の対立を根本的にずらし、無効にしてしまうような言語観の転換が含まれている。本論文はこの点を明らかにすることを目指すものである。

## 2 言語相対性仮説を取り巻く問題圏

言語相対性仮説は、それがサピア＝ウォーフの仮説と呼ばれることにも示されるように、1920年代から1940年代にかけてアメリカの言語学者エドワード・サピア (Edward Sapir : 1884 -1939)とベンジャミン・リー・ウォーフ (Benjamin Lee Whorf : 1897-1941) が著したテキストに見られる言語／思考／実在の関係を巡っての記述をその直接の起源としている。一言で表現すればそれは「現実に関する人間の認識や思考は言語に相対的である」という主張である<sup>(2)</sup>。

しかし一見明瞭に思えるこの主張には曖昧な点があり、実際その曖昧さが仮説を巡る議論に無用な混乱を生じさせたことも多かった。そこでわれわれとしては、まず仮説の定式化に関する整理から始める必要がある。最も参考になるのはフィッシュマン(Fishman[1960])による整理である。彼は「言語の特徴」に関する分類軸として<語彙もしくは『意味的』特徴－文法的特徴>、「(認知) 行動のデータ」に関する分類軸として<言語データ (文化テーマ)－非言語データ>を選び、これら二組の分類軸によって言語相対性仮説を図1のように体系化した。

「語彙もしくは『意味的』特徴－文法的特徴」の区別は明らかであろう。「言語データ (文化テーマ)－非言語データ」という区別はやや不明確だが、フィッシュマン自身の説明によれば、前者は言語行動自体、言い換えれば世界観 (Weltanschauungen)を、後者は非言語的な個人の行動についてのデータを指している。すなわち、前者は集団全域にわたる現象であるのに対し、後者は個人レベルの行動に関連したものである。

簡便のため、以下、レベル1を「語彙－世界

		(認知) 行動のデータ	
		言語データ (「文化テーマ」)	非言語データ
言語 の 特 徴	語彙もしくは 「意味的」特徴	レベル 1	レベル 2
	文法的特徴	レベル 3	レベル 4

図1 言語相対性仮説の体系化

観レベル」、レベル2を「語彙-行動レベル」、レベル3を「文法-世界観レベル」、レベル4を「文法-行動レベル」と呼ぶ。Penn [1972=1980]は「思考は言語に依存する」という見解を「強い仮説」、「言語のカテゴリーは認識に何らかの影響をおよぼす」という見解を「弱い仮説」とし、両者をはっきり区別することの重要性を強調したが、フィッシュマンの整理に照らし合わせれば「弱い仮説」はレベル2に、「強い仮説」はレベル3に対応することになる。

以上の整理を参照しながら言語相対性仮説を巡って行われてきた議論の大まかな流れをたどり、それらの議論において一体何が問題とされてきたのかを振り返ることにしよう。

有馬[1980]が指摘するように、言語相対性仮説に関連する過去の研究の流れは大きく三つの時期に分けることができる。第一期は1950年代はじめから1960年代半ばにいたる時期で、主に「弱い仮説」が肯定的評価を受けていた時期である。第二期はバーリンとケイ(Berlin & Kay [1969])の色彩語に関する研究を契機として言語相対性仮説の妥当性に疑問が投げかけられた時期であり、これが1970年代の半ばまで続く。第三期はルーシーとシュウエーダーの論文(Lucy & Shweder [1979])をきっかけにした仮説の再評価の時期で、現在まで続いていると見てよい。

言語相対性仮説に対する主要な批判は、ほとんどが第一期と第二期に提出されている。この時期、言語相対性仮説は仮説検証の方法論に関して、あるいは仮説自体の妥当性に関して、様々な批判を受けてきたが、ここではそれらのうち代表的なものを各レベルごとに見ておくことにする。

(1) 「語彙-世界観レベル」での仮説に対する批判

このレベルの仮説がもつ最大の問題は、われわれは異なる「世界観」を比較するための固定された基準をもっていないということである。というのも、「世界観」の定義上、われわれはいずれかの「世界観」に属さざるを得ないわけであるから、いずれの「世界観」とも独立した座標系を想定することは論理的に不可能なのである。

ウォーフはこのレベルに属する仮説をいくつか述べているが、それらは上のような問題点を反映して論理的に飛躍したものとなっている。例えば彼は言語が異なれば概念体系（これは「世界観」と言い換えてもよいであろう）が異なるということを示すために、言語によって物体のコード化の仕方が違っているということを引き合いに出す。ホピ語には鳥以外の飛ぶものすべてを指す一つの名詞があり、英語ならば「昆虫」／「飛行機」／「飛行士」と区別するところを同一の語で表現する。逆に英語では「雪」という一語で表すものをエスキモーは三つの言葉で区別する、というように。だが夙に指摘されていたように、言語によってコード化の仕方が異なるということを言っただけでは思考も異なると結論することはできない<sup>(9)</sup>。そう主張するならば言語の違いが思考の違いを引き起こすということを前提していることになり、議論が循環してしまうのは明らかである。

先のウォーフの例が真にこのレベルの仮説を支持する証拠となるためには、①言語のある側面（ここではコード化の仕方）がそれを話す者の心理的機構（ここでは「世界観」）と何らかの関係をもっていること、②言語のある側面の相違（ここではコード化の仕方の相違）がそれを話す者の心理的機構の相違を引き起こすこと、の二点を示す必要がある。しかしこのレベルの仮説ではこの二つがともに不可能である。

なぜなら「世界観」はあまりに漠然としていて、それがコード化の仕方と一体どんな関係をもっているのかが全く明らかでないし、先に述べたように「世界観」同士を比較することができない以上、「世界観の相違」を言うことにも意味がないからである。

#### (2)「文法—世界観レベル」での仮説に対する批判

このレベルの仮説に属する具体例としては、ウォーフがホビ族の時間概念について行った議論が挙げられる。ウォーフはそこで、ホビ語にはヨーロッパ諸語がもっているような時間概念を表現する文法形態や構文が存在しないことから、ホビ族にはわれわれの時間概念に該当するような時間概念はないと結論するのである。このような議論に対して「語彙—世界観レベル」の仮説が受けた批判がそのまま成り立つことは見易い。第一に、ここでは「時間概念を表現する文法形態や構文」が、それらと独立した「時間概念」とどういう関係をもっているのかが明らかでない（もし「時間概念を表現する文法形態や構文」と「時間概念」が独立でないならば、つまりそもそも「時間概念」が「時間概念を表現する文法形態や構文」によって定義されるのであれば、ウォーフの議論は同語反覆的に真であるが、その場合ウォーフは言語学的に見て英語とホビ語は異なるという事実を指摘しているに過ぎなくなる）。第二に、われわれはわれわれの「時間概念」を通してしか世界を見ることができないのであるから、「時間概念が存在しない」というのがどのような事態であるのか理解不能である。

#### (3)「語彙—行動レベル」での仮説に対する批判

言語相対性仮説を巡る第二期の研究のほとんどは「語彙—行動レベル」の仮説を批判したも

のである。それらの批判の論拠は「物理的・生理的レベルでの普遍性が言語のカテゴリーを決定している」というものであった。ハイダー(Heider[1972])によれば、それまで言語と認知との関係を巡って行われてきた研究は色彩を連続した均一の物理的次元と看做しており、それが言語によって恣意的に色彩語のカテゴリーへと切り取られるということを前提としていた。これに対してハイダーは、どのような言語であっても特定の色が普遍的に最もコード化しやすく、短期記憶においても長期記憶においても最も正確に思い出されるであろうという仮説を立てて実験を行い、いずれの仮説も支持されるという結果を得た。

自然言語のコード化の違いが記憶を左右するというためには、①言語によって対象のコード化の仕方が異なる、②コード化の容易さの違いに応じて記憶のしやすさが変化する、という二点が示されなくてはならない。ハイダーの実験結果は、色の場合このいずれもが言えないということを示すものである。なぜなら、多くの言語において同じ色が最もコード化しやすく、これらの色はそれに対応するコード(色彩語)が存在しない場合でさえ最も記憶されやすいからである(4)。

#### (4)「文法—行動レベル」での仮説に対する批判

このレベルの仮説は「文法」を独立変数として扱うことの難しさが原因となって体系的な研究を生み出しておらず、言語相対性仮説に対する重要な批判も見られない。

「サピア=ウォーフの仮説」という別称に示されるように、サピアとウォーフが等しく主張していたと看做されがちな言語相対性仮説であるが、それに対する批判はここまで見てきた通り主にウォーフの議論に向けられたものであっ

た。そこでそれらの批判を踏まえた上で、次節ではサピア自身の残したテキストに即して彼の言語論を再検討してみることにしたい。それによって言語相対性仮説に対する批判の多くがサピアの言語論に対しては成り立たないということが明らかになるだろう。

### 3 サピアの言語観

言語学者としてのサピアは、アメリカにおける音韻論の先駆的業績（『言語における音パターン』、『音素の心理的実在』）を残していることから窺われるように、構造主義の立場をとっていた。言語構造は決して人間が意識的に作り出したものではなく、無意識的、先理的(pre-rational)な性質をもっている。重要なのは、この構造が何らかの物理的説明の可能な実体ではなく、「機能的体系」だということである。つまり言葉の本質は概念の分類法やその形態的形式づけ、関係づけにあるのであって、その物理的基盤にあるわけではない。サピアにとって言語の研究とは、われわれが言語と呼ぶ恣意的な記号表示体系の機能と形態についての探求に他ならない。このようなサピアの言語観はフェルディナン・ド・ソシュールの言語観と驚くほど似ていると言ってよい。

言語相対性仮説を巡る議論で常に論争的となってきた言語と思考(思惟(thought))との関係について、サピアはどのようなことを述べているだろうか。まず主張されるのは、言語は必ずしも思考を表現しているわけではないということである。というのも言語は本来的には先理的(pre-rational)な機能であり、思考を表現するという機能は言語の諸機能の中で最も高次のものだからだ。サピアにとって思考と言語との関係は、身体とそれを包む衣服のような関係にあるのではない。言語はあらかじめ用意された道、「表現の溝」(慣習)であり、本来概念の平面よ

りも低い用途に充てられた道具である。思考はその内容の洗練された解釈として起ち上がったと考えるのが一番もっともらしい。すなわち思考は言語と手をたずさえて歩くのではなく、隠れて水面下にある言語の頂線上に軽く乗っかっているのである。

しかし思考が言語の上に「乗っている」以上、言語があってはじめて思考が可能になるということにもなる。サピアは〈著者一人としては、言語なしで考えることができ、推理することさえできるという、非常に多くの人々に抱懐されている感じは、錯覚だとの意見を強くいただいている〉(Sapir[1921=1957:13])と述べている。だがこのことは言語の発達が思考の発達に大きく依存するという可能性を否定するものではない。言語は先理的に起こったと想定してもよいが、高度に発達した記号の体系が、明確な概念や思考すなわち概念の処理法の発生以前に出来上がっていたと想像してはならないのである。サピアはこのような思考と言語との関係を生産品と器械との関係に例え、器械(言語)は生産品(思考)を可能にし、生産品は器械を精製すると述べている。以上のような論述を見るだけでも、「思考は言語に依存する」という強い形での言語相対性仮説をサピアが主張していたのでないことは明らかであろう。

さらにサピアは主著『言語』の中の「言語と人種と文化」と題された章の中で、言語形態と思惟(思考)との関係についての考察を含む重要な議論を行っている。

まずサピアは「言語および文化」と「人種」との相関を否定する。言語や文化は社会的な現象であるのに対して人種が生物学的概念であることを考えれば、「言語および文化」と「人種」との間に何らかの関係を想定することには何の根拠もないことは明らかだということである。さ

らに彼は豊富な事例をもとに、共に社会的な現象である言語と文化の間にも因果関係は存在しないと断言する。なぜなら、過去において接触するに至った人種や文化が深く同化する傾向があるのに対し、隣接する諸言語は単に偶然かつ皮相的に同化するに過ぎないからである。結局、言語／文化／人種という三者の間には関係と呼べるようなものはないと主張されることになる。

また、通常人種と結び付けて考えられることの多い「気質(temperament)」やその人種の「精神」が言語の特質へと反映されているという考えにもサピアは強く反対する。これはサピア＝ウォーフの仮説と呼ばれるものが前節で見たようにしばしば言語決定論として、「言語はそれを話す者たちの集団的精神を反映する」と解釈されてきたのを振り返るとき特に印象的である。サピアは「ある言語の形態がその民族的気質と、少しでも関係のあることを示そうとしても、それは不可能であろう」(Sapir [1921 = 1957 : 219])と述べる。なぜなら、言語変化はそれ自体のダイナミズムを有しているのであり、それは「河の進路が四囲の山水の気分とは無関係であるように、話者たちの感情や情緒には無関係である」(Sapir[1921=1957 : 220])からだ<sup>5)</sup>。

このように、われわれの心的生活の情緒の面は、言語の形態においてごくわずかに現れるに過ぎない。一方、言語とわれわれの「思惟の溝」(＝思考の慣習)とは解けぬまでに織り交ぜられていて、ある意味では同一物であるとサピアは言う(この場合の「同一物」とは、別々に存在する二つのものが同一であるということではなく、両者が分離しがたく織り合わさっていて別々に考えることができないということである)。しかしサピアはここで「言語が異なればそれを話すひとびとの思考も異なる」という主張を行っているわけではない。むしろ逆なので

ある。「思惟の根本的な形状には重大な人種上の差異が存することを一つとして示す例がないのを見れば、思惟の現実的過程の無限の変異性に対する別名である言語形態の無限の変異性が、このような明白な人種上の差異を表示するはずがない」(Sapir[1921=1957 : 220])というのがサピアの言いたいことなのだ。ここでサピアが「思惟の根本的な形状」と「思惟の現実的過程」(＝言語形態)とを峻別していることに注意すべきである。続く箇所では次のように述べられている。

「元来すべての言語の潜在的内容は、同一であって、それは経験の直観的な「知識」である。二つと同一のものがないのは外に現われた形式である。それは、われわれの言語的形態法と称するこの形式が、思惟の共同の「術」であり、すなわち個人的感情から無該当なものを取り去った術であるからだ。そこでどれほど分析したところで、言語が人種それ自体から生じえないのは、ソネット(十四行詩)が人種から生じ得ないのと同様である」(Sapir[1921=1957 : 220])

以上の行論においてサピアは「思惟の根本的な形状」すなわち「すべての言語の潜在的内容は「経験の直観的な『知識』」という普遍的内容をもち、「思惟の現実的過程」すなわち「外に現われた言語的形態法と称する形式」において無限の変異性が現われると言っているのである。われわれはここでサピアが言語の形態における相対性と言語の潜在的 content における普遍性が両立するという主張を行っていることに注目すべきであろう<sup>6)</sup>。言語相対性仮説に対して第二期に盛んに行われた批判、すなわち言語のカテゴリーは全人類にとって普遍的な物理的・生理的基盤に根差しているという批判は、決してサピアの言語観と両立不能ではないのである。

サピアは言語と文化との関係を述べるにあたって二つの重要な区別に言及している。第一の区別は次の部分に見られる。

《また文化と言語の間に、真の意味で、因果の関係があるとも信じられない。文化とはある社会が為し、また考えるところの「もの」であると定義できよう。言語は思惟の特定の「方式」である。選択された経験目録（文化、すなわち社会のなした重大な選択）と、その社会がそれによってすべての経験を表現する特定の仕方との間に、どんな特殊な因果関係の存在を期待しうるかを、明らかにすることは困難である》(Sapir[1921=1957: 220])

この部分では「文化、すなわち社会のなした重大な選択」である「選択された経験目録」と「思惟の特定の方式である言語」すなわち「その社会がそれによってすべての経験を表現する特定の仕方」とが区別され、両者の間に因果関係を期待することは難しいと述べられている。

第二の区別は言語の「形態」と言語の「内容」の区別である。ここで言語の内容とはその言語がもつ語彙のことであると考えてよい。ここまでの議論でサピアが言語について論じてきた部分では専ら言語の形態が問題とされ、言語の内容は考慮されていなかった。言語の形態と内容は全く異なる機制に従うものである。先に見たように、サピアは言語の形態と文化との間にはほとんど関係がないと繰り返し述べているが、《言語の単なる内容なら、それが文化と密接に関係することは論をまたない》(Sapir [1921 = 1957: 221])と云うのである。だが同時に、ある言語がもつ語彙は決して固定的ではないし、言語形態によって制約を受けるわけでもない論じられている点に注意しておかなければならない。サピアはどのような言語であっても必要に応じて大した困難もなくあらゆる語彙を用意す

ることができる」と明言している。「語彙の違いを言っただけでは思考の相違を示したことにはならない」という言語相対性仮説に対してしばしば行われてきた批判は、少なくともサピアに対しては成り立たないことになる。なぜなら彼は語彙というものは必要と関心に応じて決まるものだと自ら語っているのだから。

以上のサピアの議論をまとめれば、まず普遍的内容をもつ「思惟の根本的な形状」と様々な形をとる「思惟の現実的過程＝言語形態」が区別されることになる。さらに後者の「思惟の現実的過程＝言語形態」が「思惟の方式」として、思惟の結果生まれる「もの」つまり「文化すなわち選択された経験目録」から区別されることになる。また「言語の形態」と「言語の内容」とが区別され、両者の違いが強調されている。これらの区別からサピアが言語と思考（思惟）、文化との関係についてどのように考えていたのかを整理すれば、次のようになろう。

「思惟の根本的な形状」＝「すべての言語の潜在的内容」＝「経験の直観的な【知識】」は全ての言語において同一である。一方「思惟の現実的過程＝言語形態」は言語によって千差万別である。だがこの「言語形態」と文化／人種／気質との間に関係と呼べるようなものは存在しない。「言語の内容」＝「言語の語彙」は文化と密接な関係をもつ。しかし「言語の語彙」はそれを話す人々の関心に応じて用意することができ、決して固定されたものではない。

つまりサピアは、「思惟の根本的な形状」の普遍性の上に「言語形態＝思惟の方式」の相対性が成り立っているが、その相対性は思惟の結果生まれる「もの」である文化とは因果関係をもたないと言っているのである。しかし以下に示すように、サピアの論述の中には「社会的實在」(＝「現実世界」＝「社会的現実」)は言語に相

対的であるという記述もいくつか見られる。

《言語は「社会的実在」(social reality)に対する一つの指標である。一般に、言語が社会科学の研究者にとってきわめて重要なものであると考えられているわけではないが、社会問題と社会の過程に関する我々のすべての思考は言語によって強く規定されていると言える。人間は客観的世界にだけ生きているのではないし、またごく普通の社会的活動の世界にだけ生きているのでもない。むしろ人間こそ、自己の社会の表現手段となった言語に大きく左右されていると言える。人間は、言語を用いずとも本質的に現実に適応するから、言語というものは、伝達や内省といった特定の諸問題を解決するための単なる偶然の手段に過ぎないと考えることは、まったくの誤解である。つまり「現実世界」は特定集団の言語習慣の上に相当な程度まで無意識的に構築されているのである。これまでに、二つの言語が、同一の社会的現実を表現していると考えられる程、きわめて類似している例はない。様々な社会が存在する世界は、それぞれ異質の世界である。単に別々の付箋が添付された同一世界ではありえないのである》(Sapir [1949 = 1983 : 158-159])

ごく普通に考えれば、「社会的実在」(=「現実世界」=「社会的現実」)と呼ばれるものは「文化」と呼ばれるものと密接な関係をもっているのではないだろうか。にもかかわらず、サピアは一方で言語と文化の間には関係と呼べるようなものはないと述べ、他方では「社会的実在」(「現実世界」=「社会的現実」)は言語に相対的であると述べるのである。われわれはサピアのこの矛盾とも見える議論をどのように解釈すればよいのだろうか。この問題について、次節ではサピアが二つの主題、すなわち「直接経験」と「無意識の行動パタン」に関して行っ

た議論を手掛かりに考えてみることにしたい。

#### 4 サピアの言語観に見られる〈言語論的転回〉の萌芽

サピアは1933年の論文「言語」の中で、言語と直接経験(direct experience)との関係について述べている。「直接経験」を先の「すべての言語の潜在的な内容(the latent content of all languages)」や「経験の直観的【知識】(the intuitive science of experience)」と同一と考えてよいかどうかは検討の余地のあるところだが、ここでは両者が同一であるとして議論を進めることにする。サピアは、《言語は我々の直接経験を報告、言及、あるいは直接経験の代理を務める記号体系であると考えられることがあるが、実際の言語行動においては、言語と直接経験は分離関係、並行関係にあるのではなく、両者は相互に深くかかわっているのである》(Sapir [1949=1983 : 6])と言う。言語は経験との間で不断の相互作用を行っているという点で、数学の記号体系や手旗信号法の簡単で単一の記号体系などのように冷えた状態(cold status)にあるものとは異なる。すなわち、《言語は経験を指示、形成、解釈、発見するだけでなく、我々の日常生活の大半をしめる一連の間個人的言語行動にあつては、ことばと行為は相互に補足しつつ、それぞれの機能をはたして完璧な網状組織を形成するという意味で、言語は経験の代理をつとめるということである》(Sapir [1949 = 1983 : 7])。したがって言語は経験の完全な記号体系であり、現実の言語行動の場面では、言語と行為は分離不可能であるとされるのである。つまりサピアにおいては言語を抜きにした経験や行為といったものは考えられず、逆に経験や行為と無関係な言語といったものも存在しない。この意味において言語体系が異なれば「現実世界」も異なるという主張がなされるこ

とになると解釈して構わないだろう。

しかしサピアは、同一の世界が「言語によって異なる仕方で切り取られる」と考えているわけではない。そのように考えることは言語の機能を「指示」という非常に特殊な一つの機能へと限定してしまうことになるからだ。日常言語は経験／行為と分離不可能なものとして、非常に豊かな表現力をもっている。純粹に形式的なパターンである音声／単語／文法形式／句／文は、もしも「行動」という観点から十分に理解するとすれば、常に意図的あるいは非意図的な「表出のシンボリズム(symbolism of expression)」と込みにして考えなければならない。例えば、皮肉表現のように、特定の文脈ではある語が表面上の意味と逆の意味を示すことがある。また表面上は同一のメッセージであっても、自分に対する話し手の心理状態がどうであるか、あるいは語られた言葉に愛情や怒りや恐れなどの原初的表現が通常の評価を遥かに越えた意味を付加していないかどうかで異なって解釈される<sup>⑧</sup>。上記の例のように、およそいかなる単語や句でさえもそれが埋め込まれる文脈に応じて無限に多様な意味を帯びることができるという事実は、あらゆる言語行動において二つの異なる言語体系、指示の類型(pattern of reference)と表現の類型(pattern of expression)が絡み合っていることを示唆しているとサピアは言う。この意味において、すなわちあらゆる言語のいかなる単語／文法形式／句／文であっても非常に多様な意味を帯びることができるという点においては、言語形態と文化との間に必然的な関係と呼べるようなものは存在しない。

サピアが否定するのは、言語と呼ばれる領域と思考と呼ばれる領域、現実(経験／行為)と呼ばれる領域を区別し、言語の相違が思考や現実の相違を引き起こすという考えである。確か

に彼が〈思考は言語によって強く規定されている〉と言い、〈「現実世界」は特定集団の言語慣習の上に相当な程度まで無意識に構築されている〉と言うとき、彼は言語／思考／現実という三つの領域を区別し、言語の思考／現実に対する優位性を主張しているように見える。しかしわれわれは同時にサピアが、〈言語形態と「思考の溝」(＝言語習慣)とは解けぬまでに織り交ぜられていてある意味では同一である〉と述べ、〈言語は経験を指示、形成、解釈、発見するだけでなく、我々の日常生活の大半をしめる間個人的言語行動にあっては、ことばと行為は相互に補足しつつ、それぞれの機能をはたして完璧な網状組織を形成する〉と述べるのも見てきた。言語／思考／現実の関係に対するサピアの一見曖昧な態度を理解する鍵は、「無意識の行動パターン」についての彼の議論にある。

サピアは通常の間人がそれと気づかずに従っている社会行動、個人行動上の類型を「社会における行動の無意識の類型化」と呼んでいる。これは何ら神秘的な現象ではなく、個人が常に暗黙の内に従っている行為のあらまし、境界、意味に対して各人がほとんど無自覚であるために生ずるのである。普通の人々に社会行動の形式が適切に理解されないのは、経験の要素間の関係こそがそれらの要素に形式と意味とを与えるのであるが、このような関係は意識的に知覚されるというよりはより強力に「感じられ」、「直観される」ものだからである。例えばオーストラリアの原住民にとっては、人を呼ぶのにどのような親族用語を用いるかを述べることは容易であり、終始一貫してあたかも規則を知り尽くしているかのごとく行動するが、自分たちの行動を一般的に説明する規則を抽出するよう求められてもほとんど答えることはできない。しかしたとえ明示的な規則という形で述べるこ

とはできなくとも、ある意味において彼らはその一般的規則を十分に把握しているはずである。この種の知識に対してサピアは「直観」という用語を用いる<sup>(9)</sup>。このような「直観」は通常意識化されないし、する必要もない。むしろ「直観」を意識化することはわれわれの日常生活において有害であるかもしれないとサピアは言う<sup>(10)</sup>。

ここで言われている「行動の無意識の類型」とは、言語と行為／経験の絡み合った総体、われわれの言語の適用を含む諸活動の総体のことである。〈思考は言語によって強く規定されている〉、〈「現実世界」は特定集団の言語習慣の上に相当な程度まで無意識に構築されている〉というとき、サピアは「言語」や「言語習慣」と「行動の無意識の類型」をほとんど同義のものとして使用している。サピアの言葉をこの文脈で捉え直すならば、彼は決して「言語の相違が思考や現実の違いを引き起こす」と言っていたのではなく、「行動の無意識の類型」すなわち「言語の適用を含むわれわれの諸活動の総体」こそが原初的なものと見なされるべきであり、それを「思考」や「現実世界」に還元することはできないと主張していたのだと考えるべきである。サピアが否定したのは、認識主体（思考、理性）／言語／現実（実在、事実、世界）という三者の間の関係について想定される一つのモデルであったと言ってよい。このモデルは言葉の意味を言葉と実在との結び付きと考え、認識主体間のコミュニケーションを言葉を通じて共有される実在によって説明し、基礎づけようとする。このことが可能であるためには、言葉は実在を忠実に映し出す鏡であること、あるいは実在を歪めることなく写し取る透明な媒体であることが求められる。つまりコミュニケーションは〈認識主体－（言語）－実在－（言

語）－認識主体〉という図式で理解されることになるのである。これに対してサピアは言葉の意味というものが言語の外に根拠をもっているわけではなく、あくまでも言語体系の内部で、体系を構成する要素間の関係として与えられるのだと論じた。しかし、もしサピアが意味の自律性、言語の不透明性だけを強調し、〈認識主体－言語－現実〉という枠組はそのままにしておいたとすれば、先のコミュニケーション図式は〈（認識主体）－言語1－実在－言語2－（認識主体）〉という形に修正され、われわれはウォーフの言うように〈観察者として同等ではなく、幾分相違する世界観に到達することになる〉。

だがサピアは最終的にこのようなコミュニケーション図式自体、すなわち認識主体／言語／実在が分離関係、並行関係にあるという前提自体を放棄した。これらは独立した領域としてお互いに基礎づけたり、基礎づけられたりする関係にあるわけではないし、その内のどれかが特権的な領域として人間同士のコミュニケーションを保証するわけでもない。さらにサピアは言語とその他の人間の行為様式との区別が維持しがたく、両者が連続したものであり、相互に分ち難く織り合わされていることを強調することによって、われわれの言語使用が一つの行為＝行動類型であること、そしてそれが他の何かに還元不能な原初的事態であることを示したのである。われわれはここに今世紀における思潮の大きな転換、いわゆる「言語論的転回」を経た後の言語観の一つの典型を見ることが出来る。歴史的に見れば、サピアの著作に見られる言語論的転回の契機は彼の言語観がウォーフへ、そしていわゆる言語相対性仮説へと引き継がれていくに連れ、次第に言語論以前の認識論的枠組の中に埋め込み戻されることになってい

ったと言ってよいだろう。われわれはサビアのテキストをもう一度言語論的枠組の中へと投げ返してやる必要があるだろう。そのような作業を通じて言語論的に再構成されたコミュニケーション論に新たな展望をもたらす可能性をはらんでいる点に、コミュニケーション論におけるサビアの言語観の現代的意味があると言えるのである。

#### 註

- (1) Lucy[1992]は、方法論についての批判的検討を交えつつ、言語相対性仮説をめぐる行われてきた経験的研究について見通しのよい展望を与えている。
- (2) 言語と人間の思考や記憶、認知過程との関係は古くから繰り返し哲学者の関心を惹いてきた主題であり、この問題に関する考察の起源は哲学の起源と同様に古い。しかし注意すべきは、ここで述べたような言語相対性仮説の主張が問題となるのは、言語が人間の認識や思考、コミュニケーションにおいて果たす役割に関しある特定の見方を前提した場合に限られるという点である。例えば Hacking[1975=1989]は、彼が「観念の全盛期」と呼ぶ17世紀のイギリスにおいて、哲学者の仕事は言語という人を惑わせる夾雑物を取り去って純粋な「観念(idea)」(＝われわれが論理的に自我以外のものにコミットすることなく黙想できる存在)を見るよう専心することだったと論じている。人間の意味伝達において中心となるのは精神の内に存在する観念であり、言語はこの観念と結びつくことによって自分が過去に抱いていた観念を呼び戻すための、あるいは自分以外の人間の精神の内に自分の精神の内にあるのと同じ観念を生じさせるための二次的な手段と看做されていたのである。このように言語が本質的に私秘的なものと考えられ

ている場合には、言語の相対性が問われること自体ありえなかった。問題は、言語が本質的に公共的なものだという考えが採られるときに生ずる。公共的言語観は同じ言葉を話す者の間でのコミュニケーションに関する懐疑を否定するものの、異なる言葉を話す者の間でのコミュニケーションに関する懐疑を惹き起こしてしまうように思われるのである。

「公共的存在としての言語」という考えが歴史上のどの時点で「私秘的存在としての言語」という考えにとって代わったのかという問題に答えることは難しい。現代においてさえ「私秘的存在としての言語」という考えが完全に姿を消したとは決して言えないからである(特に認知科学における「表象主義」には「私秘的存在としての言語」という考えが根強く残っている。この点については Hacking[1975=1989: 5-6]を、また認知科学における表象主義については土屋[1986]の第3章を参照)。しかし Penn[1972=1980]や Hacking[1975=1989]が指摘するように、「公共的存在としての言語」という考えがドイツ・ロマン主義と密接な関係をもっているということは確かである。ここには言語が国家的アイデンティティ確立のための重要な手段とされたということ、そしてそれが容易にナショナリズム昂揚の契機となったということと併せて重要な問題がはらまれているが、それらに関する考察は別稿で行うことにしたい。

- (3) このような観点から Whorf に対して批判を行ったものとして、Lenneberg [1953], Feuer [1953], Brown & Lenneberg [1958], Black[1959]などがある。
- (4) 以上のような Heider の議論は後に Lucy & Shweder [1979]の周到な批判にさらされることになる。
- (5) このような言語自体のもつ変化のダイナミズムをサビアは駆流(drift)と呼んでいる。
- (6) Whorf[1956=1978b: 181-182]もまた人間の知覚作用の普遍性をはっきりと述べている。

- (7)このように言語と行為との不可分な関係を説く Sapirの言語観には明らかに後期WittgensteinやJ. L. Austinの言語行為論と通じ合うところがある
- (8)「表出のシンボリズム」に関するSapirのこのような議論はコミュニケーション論におけるコード=メッセージ図式に対する根本的な批判を含意している。
- (9)「知っている」ということと「言うことができる」とこととの関係は後期Wittgensteinにとっても重要な考察の対象であった。例えばWittgenstein [1953=1976: § 78]を参照せよ。
- (10)以下の部分を参照。

〈われわれは行為を自由に制御できるために、行動類型については十分な知識をもっていると錯覚することがしばしばある。しかし奇妙なことであるが、実際のテストにおいては、われわれが行動の諸形式、しかも非常に明瞭に知覚はするものの、それを述べる段になると実に曖昧な漠然とした内容でしか示しえないような行動の諸形式に、厳格な規則性をもって服従させられていることが分かるのである。われわれは自己を支配している類型

に気付いていないがために、それだけ一層確実な行動をとるようである。意識的生活には限界がある。そのため社会的行動のうちの層高度な形式を、純粹に意識的な支配に従属せしめようとする試みは必ず不幸を招く。子供でさえも、最も難しい言語を、まるで慣用語法的な容易さで話すことができるが、しかし子供の無意識の玩具としか思えないようなあの信じられないほどの微細な言語の内の単なる諸要素を定義するために、著しく分析的な型の精神を必要とするという事実の中には、おそらく深遠な教訓が存在するのであろう。現代人は、行動のあらゆる形式を無理やり意識の支配下において、しかもその断片的または実験に基づく分析の結果を行為の参考にしようとする不断の試みにおいて、小さな、しかも眩惑的な富のために、巨額の富を現実に放棄していると言えないだろうか。比喩的にいえば、あたかも数千ドルの銀行預金を、少額ながら一目瞭然たる価値を持った数枚の金ピカの硬貨と交換する誤れる狂信者のごときものである〉(Sapir[1949=1983: 206])

またSapir[1949=1983: 219-220]も参照のこと。

## 引用文献

有馬道子 1980 今日のウォーフ(Penn[1972=1980]の訳者解説)

Berlin, B., & Kay, P. 1969 *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. University of California Press.

Black, M. 1959 Linguistic relativity: The views of Benjamin Lee Whorf. *Philosophical Review*, 68, 228-238.

Brown, R. W., & Lenneberg, E. H. 1958 Studies in linguistic relativity. In E. E. MacCoby, T. M. Newcomb & E. L. Hartley (Eds.), *Readings in Social Psychology*. New York: Holt, Rinehart and Winston, pp.9-18.

Feuer, L. S. 1953 Sociological aspects of the relation between language and philosophy. *Philosophy of Science*, 20, 85-100.

Fishman, J. A. 1960 A systematization of the Whorfian hypothesis. *Behavioral Science*, 5, 323-339.

Hacking, I. 1975 *Why Does Language Matter to Philosophy*. Cambridge University Press. =伊藤邦武(訳) 1989 言語はなぜ哲学の問題になるのか 勁草書房

Heider, E. R. 1972 Universals in color naming and memory. *Journal of Experimental Psychology*, 93, 10-20.

Lenneberg, E. H. 1953 Cognition in ethnolinguistics. *Language*, 29, 463-471.

Lucy, J. A. 1992 *Language diversity and thought: A reformulation of the linguistic relativity hypothesis*. Cambridge University

Press.

Lucy, J. A., & Shweder, R. A. 1979 Whorf and his critics: Linguistic and nonlinguistic influences on color memory. *American Anthropologist*, 81, 581-615.

Penn, J. 1972 *Linguistic Relativity versus Innate Ideas*. The Hague. = 有馬道子(訳) 1980 言語の相対性について 大修館書店

Sapir, E. 1921 *Language*. New York: Harcourt, Brace & Co. = 泉井久之助(訳) 1957 言語—ことばの研究 紀伊國屋書店  
—— 1949 *Selected Writings of Edward Sapir in Language, Culture and Personality*. University of California Press. = 平林幹郎(訳) 1983 言語・文化・パーソナリティー—サピア言語文化論集—北星堂

土屋 俊 1986 心の科学は可能か 東京大学出版会

Whorf, B. L. 1956 *Language, Thought, and Reality*. The M.I.T. Press. = 池上嘉彦(訳) 1978a 言語・思考・現実 弘文堂 = 有馬道子(訳) 1978b 言語・思考・実在 南雲堂

Wittgenstein, L. 1953 *Philosophische Untersuchungen*. Basil Blackwell. = 藤本隆志(訳) 1976 哲学探究 大修館書店

(けんじょう たけひで)

◎橋爪大三郎 各3000円 380	◎橋爪大三郎 コレクション I II III 加藤秀一・坂本佳鶴恵・瀬地山角編—内容目録各3296円 380	◎野家啓一 32000円 380	◎富島美子 30000円 380	◎高森 樹 26700円 310	◎レイ・アンドレ／矢木公子・黒木雅子訳 50000円 380	◎吉澤夏子 20000円 310	◎杉本貴代栄 20000円 380	◎姫岡とし子 30000円 380	◎小谷真理 20000円 380	◎大野盛雄・小島麗逸編著 20000円 310	◎神野由起 27800円 310
主 婦 忘れられた労働者	男でもなく女でもなく 新時代のアンドロジナスたちへ	女がうつる ヒステリー仕掛けの文学論	言語行為の現象学	フェミニズムの困難 どういう社会が平等な社会か	社会福祉とフェミニズム	近代ドイツの母性主義フェミニズム	女性状無意識 女性の心理論序説	アジア 阿 考	趣味の誕生 百貨店が作ったテイスト		

東京都文京区後楽2-23 勁草書房 電話 (03) 3814-6861 振替 00150-2-175253 \* 定価は消費税込みです。